

「共同」が芸術実践に結びつくとき

千人針習俗とチェコのアクションアートにおける「共同」に関する考察を出発点として

東京藝術大学大学院美術研究科 先端芸術表現研究領域 日原聖子

要旨

本論の目的は、ものや行為を介した「共同」が芸術実践に結びつく際の過程に焦点をあて、その過程がどのような構造や形式を要しているのかを考察し、共同を今日の芸術実践にどのように応答させることができるのか、その可能性を提示することにある。

本論における共同と芸術実践の結びつきが意味すること、つまり「共につくこと、共に芸術を実践すること」とは、ただ単に何かを複数人で行うという単純な行為以上に、いくつかのなくてはならない条件や状況を互いに引き受けることを必要としながら、ものや行為を介しながら芸術を実践することを意味する。その共同の過程では、苦しみや鬱屈を互いに引き受けようとする「共感」の実践が共同のきっかけとなったり、その共感をきっかけとしてもものや行為を介して「共につくこと、共に芸術を実践」しようとする過程そのものや、その過程を介して他者と互いに共感を実践することそのものも、互いを結びつけ合いながら共に芸術を実践する形となる。そうした過程を、本論では共同と呼びたい。

共同を行うためには、互いに強く条件を共有し合わなければ成り立たない。共同を介して過程を他者と共有しながら、その実践を共に経験する者同士を結びつかせ、他者の苦しみを互いに引き受け、そのことを可能にしなければならない。そして共同が結びつく芸術実践は、時には公に提示できる形式へと変容していく。

筆者は自身の作品制作において、制作過程における共同を開示せずとも、作品自体に共同の意味が含まれ作品がそれとして成り立つ方法を思考してきた。本研究では先行事例の考察および筆者の博士研究作品を通じて共同の意味と意義を明らかにし、芸術実践に含ませることのできる共同の広がり可能性を示したい。

第1章「身体性を付着させるテキスタイルと「共同」」ではテキスタイルに関する風習や歴史を中心に

参照し、ものや行為を介して身体性をものへ付着する方法と、共同の結びつきについて考察する。第1節「テキスタイルと「共感」の関係」では、まずジェームズ・フレーザーによる「共感呪術」を参照することを軸に、ものをつくることや、ものを他者に手渡すなどして他者と関係する過程を介した共感の実践について述べ、共同について考察するための導入を示す。第2節「テキスタイルと「共同」する人々」では、千人針習俗をはじめとしたテキスタイルに関連する風習や歴史を参照することで、どのように「縫う」ことや人々の手仕事と行為が重なり合うのかに焦点を当て共同の形式を考察し、テキスタイルを介した芸術実践はどのように行われてきたのかを論じる。

第2章「「共同」の前提としての諸問題」では、第1章で述べたものや行為、共同と関連して、共同が内包する社会や体系に関する問題構造について述べる。特に本研究において主要な要素として扱うテキスタイルは常に「女性」と結びつきが強いように論じられてきたという背景があり、その「女性」という言葉と関連させながらこの問題に対する筆者の考えを述べる。そしてそうした前提にある諸問題を共有した上で、現代アートにおけるテキスタイルアートの芸術実践と共同についての考察に接続していく。

第3章「「共同」の可能性:社会主義時代のチェコのアクションアート」では共同への理解を深めるためチェコのアクションアートを参照し、芸術実践における共同の構造について改めて論じる。アクションアートとは社会主義時代にアーティストらが地下活動的に行っていたパフォーマンス的な芸術実践であり、共に行いその体験を共有することが重要であった。社会主義時代という背景を共有しながら共同し、体験を他者とつなげていく過程そのものが芸術実践となっていた。チェコのアクションアートを参照することで、行為を介した共同がどのようにして芸術実践として成り立っていったのか、その過程を考察する。

第4章「「共同」を実践する:自作品および博士研究作品について」では、ここまでの共同に関する考察を博士研究作品へ接続し、筆者自身にとっての共同の意味を問い直したい。筆者が自作品における実践で素材として頻繁に用いているテキスタイルは人の手を渡り、共同の精神を深めていく存在である。博士作品を制作する過程では共同を介しながら身近な友人らと「祖父母について話すこと」の意味を考えることをベースに展開させてきた。

終章では、本論で述べてきた共同の意味を改めて示し直す。共同を行うためには互いに強く条件

を共有し合わなければ成り立たない。共同を介して過程を他者と共有しながら、その実践を共に経験する者同士を結びつかせ、他者の苦しみを互いに引き受けていく、そのことを可能にしなければならない。そしてその過程は芸術実践となって他者へ提示するための形としてつながっていく。終章では本論で述べてきた共同の意味を改めて示し直したい。